

妊娠しても流産繰り返す

不育症 少ない専門医



岡山大病院産科婦人科の不育症外来を訪れた夫婦を診察する中塚教授 (岡山市北区)

妊娠しても流産を繰り返し、出産に至らない「不育症」。子宮の形や血液凝固異常などが原因と考えられ、推計で年約3万人の患者が発生している。適切な治療で出産の可能性を高められるが、専門的に診ることが出来る医師は少なく、治療にたどりつきにくい現状がある。(教運孝匡)

生殖医療 命が始まるとき

広島市内の看護師女性(29)は25歳で結婚後、流産を2回、死産を1回経験した。産科医からは「あなたに治療が要るような問題はない」と言われたが、妊娠することへの恐怖心が次第に大きくなっていった。

インターネットなどで不育症を知り、29歳で専門外来のある岡山大病院を訪ねた。検査の結果、血液が固まりやすい体質で、子宮の血流が悪いことが判明。薬による治療を経て、受診から1年3カ月後、長男を抱くことができた。

「不安だけ募る」

女性は「原因があるのかわからない」かも分らず、不安だけが募っていた。治療に踏み出せなかった」と振り返る。いま広島県内の不妊クリニックで不育症治療を続けながら、第2子出産を目指している。

不育症とは流産や死産、早期新生児死亡が2回以上あった場合を指す。無事な出産の経験があるかどうかは関係ない。厚生

年3万人発症 リスク因子特定難しく

労働省研究班の調査によると、妊娠した女性の38%が流産を経験。その中の約5%の人が不育症に該当した。

研究班メンバーの一人、岡山大学大学院保健学研究所の中塚幹也教授(54)は「妊娠初期の流産の多くは胎児の染色体異常によるもの。でも、流産を繰り返す不育症の場合、親の側が流産のリスク因子を持っていることがあります」と話す。

研究班が不育症の夫婦延べ527組を調査したところ、母体の血液凝固異常(25・0%)▽子宮の形の異常(7・8%)▽甲狀腺異常(6・8%)などが認められた。薬や手術によって治療できるものもある。

ただ、リスク因子が特定できない場合が多く、全体の65・3%を占める。中塚教授は「流産や死産のメカニズムは解明されていない部分も多い。いま行われている不育症治療の中には、まだ有効性が検証中のものもあります」と指摘する。

こうした治療の難しさに加

え、保険適用ではない検査や薬もある。そのため、流産や死産を繰り返しても検査が行われなかったり、不十分な検査で「胎児が原因だろう」と判断されて治療が行われなかったりする場合もあるという。

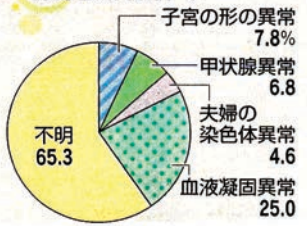
医師の知識重要

だが中塚教授は「流産は精神的にも深く傷つく。まずは医師が正しい知識と情報を患者に示し、検査や治療を選択できる機会をつくるのが大切です」と強調する。そもそも専門的に診ることが出来る医師は少ない。「患者が切実に妊娠を望んでいる場合、可能性をより高めるために医療者側も積極的に知識を備えていくべきです」

実際、不育症の診断や治療に力を入れる不育治療施設も出てきている。絹谷産婦人科(広島市中区)は5年前、不育症外来を設けた。不育治療を望む患者には、事前に不育症検査を受けるよう助言。受けずには体外受精などに臨んだ場合も、その後流産が2回あれば検査を勧めている。子宮の奇形が分かれば、手術ができる病院を紹介する。

絹谷正之院長(59)は「高齢で不育治療を始める夫婦が増える中、繰り返される流産が女性の高齢による「卵子老化」のためなのか、不育症のリスクがあるためなのか。早い段階で見極め、出産に近づける的確な対応を取る必要があります」と話している。

不育症のリスク因子 (厚労省研究班調べ)



※リスク因子が重複するケースがあるため、合計は100%にならない